

しつこいほどのアウトプットによるリスニング指導Ⅱ

1 分間 tongue twister 最終目標は思考速度の高速化

今瀬 辰郎

1. はじめに

令和2年度、大学入試センター試験が大学入学共通テストに変更になった。試験内容の大きな変更の1つが、英語の得点比であった。

3年前、前任校(岐阜県立岐山高等学校)において第2回大学入学共通テストの対象者となる1年生を担当することになった私は、リスニングの比率増加に対して対策を講じることにした。第二言語習得研究においては、リスニング能力には2つの段階があることは周知の事実である。第一段階は、音声を聞き分ける音声知覚(Perception)であり、第二段階は、音声が意味する内容を理解する意味理解(Comprehension)である。

門田によると、「シャドーイングのトレーニングにより、学習者の音声知識がいかに変容するかについては、①音声知覚の自動化、②音声知識検索の自動化を経て、③音声知識データベースの構造的変革という道筋が仮定できる」(門田 2007, p.80)とのことであった。①～③の段階を踏んで「意味理解」を達成するためには、2つの困難があった。1つは量的な限界、2つめには活動の受動性である。英語特有の音声を知覚する、つまり英語を聞いて発音を識別する経験が乏しい。加えて、リスニングという受動的な活動では、多くの生徒が集中を続けることができないと感じていた。反復練習の意欲をかきたてる教材もなく、英語が苦手な生徒は模試の過去問題でさえも聴いている間に往々にして寝てしまうのであった。

音声知覚の強化においてインプットの繰り返しが効果的なことは自明であるが、生徒が自発的に反復するような魅力的な教材や活動を探すことは難しい。アウトプットの活動については、単語の発声でさえ、口の筋肉が動かず英語特有の発音がうまくできないとか、友人に聞かれる気恥ずかしさといった物理的、身体的な障壁がある。コミュニケーションともなる

と、音声知覚、意味理解、意思表現など同時に行う作業が多岐にわたるため、発音に焦点を当てる余裕などない。しかし困難は分割して単語ベースで何度も練習したところで、英語の聴き取りの要はリエゾンや消音の聴き取りであるので、英語の文に触れる中で音声知覚を強化する必要があると考えた。

切迫した動機と必要性がない生徒たちに対して、この2つの課題を解決し、楽しさや達成感を感じさせながら意欲的に「音声知覚の自動化」と「音声知識のデータベース更新」を実現する活動として考えた活動が、前号に掲載された2分間歌唱と、本稿で紹介する1分間早口言葉であり、2つの活動両方に効果が有意にあることを確認することができた。本稿では早口言葉の活動について紹介したい。

2. 令和元年度(R1) リスニング力向上のための反復発声活動 早口言葉

早口言葉を選定した理由は、以下の5つの利点にあった。第一には、1つの早口言葉につき1つの音声に絞って識別を訓練できる点である。音声知識データベースの更新を行うために、ドリル練習のようにして1つの早口言葉で知覚できる音声を1つずつ増加させることが可能であると考えた。通常の英語での会話においては、日本人の音声知識データベースにない多くの音声が瞬時にいくつも耳に入ってくるし、意味理解も並行して行わなければならない。しかし早口言葉の場合、意味内容の理解に焦点を当てることなく、英文を音声に変換し、発音記号と一致した発音で発声して発声自身が発音の成否のチェックを行うことで音声知覚の自動化を促すことができる。日本語の例でいうと、「生麦生米生卵」と発声する際には意味をあまり考えていないことが分かる。発声速度を上げるほど意味内容の理解の比重低下が感じられるはずである。門田は、「音読トレーニングで絶対に気をつけないといけないうこととして、

耳でつくった音韻表象と目で見てつくった音韻表象が一致しているかという問題」(門田 2020, p.11)を挙げている。意味内容の理解を重視しないことが、英文を見てつくる音声と自分の発声を聴いてつくる音声を一致させることを容易にする、すなわち単語の音声を音素の連なりで表す音韻表象の一致の実現に近づけるのである。多数の早口言葉を練習することで、意味内容の理解に要する負荷を軽減し、音声知覚の困難を分割して英文の視覚情報を正確な音声に変換することが可能となる。

第二には、短時間で何度も練習可能な点である。1分間もあれば1つの早口言葉を10回は練習できる。必要なものは発音を識別する知識のみで、やればやった回数だけ英文の音声への変換が上手になり、自然と音声の知覚が自動化されると考えた。

第三には、何より楽しめる活動である点である。今回の早口言葉の位置づけは、音声の識別に焦点を当ててゲーム化した言葉遊びであることだ。言葉遊びなのでリズムに乗って楽しめるし、友人と練習して失敗しても笑いにかえることができる。そして上達すると単純にうれしい。早口言葉自体は、本来であれば小中学校の間に友達と競わせて練習させると効果的であろう。リスニングの力が向上するだけでなくスピーキングの際にもその発音を素直に活用できるようになると思われるからだ。しかし高校生にもなると、早口言葉を通して発音記号が示す通りの発音を習得したとしても、羞恥心などが活用を妨げるかもしれない。

第四には、サブボーカルリハーサル(内語反復)という、反復する脳内言語の速度の向上を通して脳内言語を生み出す速度向上が見込める点である。門田によると、サブボーカルリハーサルとは「目で見て取り込んだ文字言語を音声化して、能動的に繰り返す」もので、「内語反復」とも呼ばれる。(門田 2020, p.64)これは私自身が2015年に立てた仮説だったが、音声言語で速く話せるようになるということは、すなわち速く脳内言語で考えることができるようになることが前提にあり、それは思考速度が上昇することを意味する、と考えた。これは、速く走る能力を高めるためには速く走る練習を繰り返すというのと同じ理屈である。マラソン選手のジョギングは一般人の全力疾走並みに速い。最高速度が速いためだ。話す速度について考えると、頭の回転が速

いといわれる人には早口の人が一定数存在する。このことを考えたときに、脳内言語が速いから音声言語も自然と速くなってしまふのだという考えが生まれた。それならば発想を逆転させればよい。陸上競技のインターバルトレーニングでは、何度も一定の距離の全力疾走を繰り返すことにより、そのペースに心肺機能や筋肉、足の回転速度が慣れて走る速度を高めることができる。この結果が、マラソン選手のジョギング速度の高速化である。ランニングのインターバルトレーニングを応用し、発声において同様に高速トレーニングを行えばよいと考えた。発声については、話す速度を高める練習をすることによってサブボーカルリハーサル(内語反復)の速度を上げ、思考する際に使用する脳内言語を速くできれば、自然と思考速度も速くなるのではないかと考えた。この脳力開発は、英語だけでなくすべての学習、すべての生活における脳の活性化を意味する。この思考速度の向上という能力開発を早口言葉の活動の究極の目標に置いた。

第五には、歌唱活動と同様に、2015年に過去の勤務校(岐阜県立飛騨神岡高等学校)の生徒22名に対して上記の4つの利点を理由に同様の活動を行っており、方法論と成功の確信があった点である。

生徒には、共通テストで配点率が増加するリスニングへの対策として、早口言葉を実施すると説明した。早口言葉の一覧を配布し、1つ1つについて注意すべき発音の違いを説明し、舌や唇の使い方を説明してペアで確認をさせ、あとは毎時間の最初に各早口言葉を3回ずつ復唱させた。興味のある生徒は家庭でも練習するように指導した。

3. 調査結果と考察

1年次の早口言葉の実施項目と年度末の調査結果は以下の表のとおりである。対象は英語表現I(週3単位)の履修生徒2クラス75名であった。適切に発音できるようになったものを各自が選択するアンケートにより確認を行った。パフォーマンステストの実施は時間的な限界があるし、生徒本人が自信をもってできるようになったと回答できるなら、ある程度発音の識別ができるようになったらと考えたためである。

早口言葉に関する調査結果(人)

- ①早口言葉によって発音の違いを認識できるようになったと感じますか。

R1	A	B	C	D	合計
人数	0	6	57	12	75

- A 全く感じない B あまり感じない
C ある程度感じる D とても感じる

- ②以下の1～9の早口言葉で適切に発音できるようになったと思うものを選びなさい。

(有効回答数 66, 欠席 5名)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
人数	41	35	29	43	24	40	32	12	30
%	62%	53%	44%	65%	36%	61%	48%	18%	45%

- 1 [R/L] The right switch is the light switch.
2 [S/SH] She sells sea shells by the sea shore.
3 [V/B] Veronica bit into a very bad berry.
4 [S/TH] Six thick thistle sticks.
5 [Z/TH] This is a zither. Is this a zither?
6 [F] For fine fresh fish, phone Phil.
7 [TH, R] He threw three free throws.
8 [L] Little Linda lamb licks her lovely lips.
9 [R] I scream, you scream, we all scream for ice cream!

①の通り、早口言葉の練習を通じて大多数の生徒が「音声知識データベースの構造的変革」を実感できたことが分かる。②からは、生徒の習熟に差は生じているものの、多くの早口言葉について半数近くの生徒が音声知覚ができるようになったと感じていることが分かった。

4. まとめ

最後の授業において、最終アンケートに回答してもらい、教員の意図を説明した。たった1分間の早口言葉、これだけの活動だが、毎回の授業でしつこいほど反復することによって、生徒たちは友達と楽しみながら、自身もつ音声知識データベースの構造的変革を実現することができた。さらには、私自身が客観データで検証することはかなわないが、最近、月刊「致知」における斎藤孝明治大学教授との対談において、「脳トレ」で知られる川島隆太東北

大学加齢医学研究所所長が「僕はこれまで素読が脳の機能を高める実証データをたくさん取ってきましたが、そこで分かったことの1つはできるだけ速く読むトレーニングの効果です。速く読むことで頭の回転速度が上がります。例えば、早口言葉のようなものを毎日やっていると、脳がつくり替えられるということが見えてきたんですね。」(川島 2018)と語っていること、川島所長によるMRIを活用した調査で、意味を考えないで、文字だけを声を出して読む「素読」によって脳の前頭前野の両側の体積が増えていることが証明されているということを知った(川島 2018)。他にも斎藤孝明治大学教授など著名な教授が述べているように、制限時間内に早く文を読むという活動は脳の活性化に大きな効果をもつことが分かってきており、2015年に立てた私の仮説が科学的に実証されたと感じた(斎藤孝 2018, p.87)。

このように早口言葉の活動を通して生徒のサブローカルリハーサル(内語反復)の速度が向上し、音声知覚だけでなく英文のリーディング速度、そして思考の速度の向上という意味で、すべてのことに通じる脳力開発に貢献することができたと確信している。

参考文献

(部分掲載)

脳トレの川島隆太さんが実証データ「速音読で、脳の回転速度が速くなる」2018年8月4日。致知。
<https://www.chichi.co.jp/web/20180804sodokunosusume/?msclkid=11a2e096b4ec11ecb8450fe848aa6e90>

斎藤孝監修(2018)。『国語の力がグングン伸びる1分間速音読ドリル』。致知出版社。

(岐阜県立岐阜工業高等学校 教諭)